

保育における食育実践とその教育的意義についての一考察

A study on food education in childcare and its educational significance

青木好代*

(平成29年1月18日受理)

要約

本研究は、園で行っている食育実践を捉え、活動を通して子どもたちが「食べる力」すなわち「生きる力」を育む実践の効果に着目し、加えて園での活動が家庭へとつながり、幼児保育における教育的意義を探っていくことを目的としている。

園の食育実践としては、「野菜栽培」「調理実習と報告」「保護者への啓発」があげられる。これらが保育の中で関連し合い相乗効果を生み出し、園児らの食に対する意識の向上とともに、家庭や家族へとつながる食育としての教育的意義を捉えることが出来た。

キーワード：保育、食育、教育的意義

keywords：childcare, food education, significance education

1. はじめに

(1) 研究の背景と問題意識

人間にとって生涯心身共に健康な生活を送れることは幸せなことである。ところが様々な要因によって我々は健康を損ねることがある。

しかし、そのことによって健康の有り難さを再び痛感するのである。現在、健康維持のために生活習慣病予防の推進が提唱され、多くの国民が自身の健康管理にと検診を受け、健康な生活を維持していくための食生活の指導を受ける機会が設けられている。

21世紀に入り「成人病」のルーツは乳幼児期にあると発表された(長嶋 2004)ことは、幼い子どもたちと深くかかわる我々保育者にとって、その衝撃や驚きはことのほか大きく、改めて乳幼児教育の在り方の重要性を痛感することとなった。

人が食べるのは生きるため、発達や発育を促すため、そして、健康の保持や増進をはかるために様々な食材を組み合わせる調理し、食事内容を整えて必要な栄養を取り入れ生命維持を営んでいる。増して子どもは幼若な時期ほど発育が著し

く、身体の栄養要求量を多く必要とする。この点が大人と子どもの栄養や食生活の決定的な違いで、子どもは発達や発育のために食べなければならない。そのために食品を選び組み合わせを考え、楽しく食べることで育っていくのである。

ところが近年、食生活を取り巻く社会環境が大きく変わり、個人の食行動が多様化し、その影響を子どもたちがもろに受けて、様々な食を通しての問題行動が指摘されるようになってきている。戦後70年わが国の核家族化はほぼ定着してその人間関係は希薄化し、和やかで、且つ自由で心おきない日常の場であるはずの家庭での食卓や食生活は大変な勢いでその変化を余儀なくされてきた。

そもそも人は、食べ物を得ることで協力し合い、分かち合って食べることで絆が強まっていくと考えられている。そこには善人的で情緒的なつながりがあり、その中で暮らすことによってごく自然に対人関係や生活力が身についてくる。しかし、現在食べ物は商品として氾濫し、分かち合うという意味は失われ、食事は単に空腹感を満たす行為そのものになりつつあると危惧する声が聞かれる

(*あおきたかよ 兵庫大学短期大学部非常勤講師 幼児教育学)

ようになってきている（高橋 2009）。

こうした状況に大人にも子どもにも食育の必要性が求められ、国は21世紀における日本の発展には、子どもたちの健全な心と身体を培い、未来や国際社会に向かって羽ばたくことができるような援助が必要であるとの見解に立ち、2005年7月「食育基本法」を制定し、国民運動の一環としてその推進に力を注いできた。

保育の分野では、2009年4月に施行された『幼稚園教育要領』『健康』の領域には「幼児の食生活の実情に配慮し、和やかな雰囲気の中で教師や他の幼児と食べる喜びや楽しさを味わったり、様々な食べ物への興味や関心を持ったりするなどし、進んで食べようとする気持ちが育つように」と明示された。『保育所保育指針』では、「食育基本法」を踏まえ、「保育所における食育に関する指針」を参考に、保育内容として「食育の推進」の項目が設けられ、「食育は人としての自立と自尊のための生涯学習」として位置付けられている。そのねらいは、「望ましい生活習慣の定着や食生活を営む力を育むことにあり、人間形成の基礎を培う極めて重要な時期に、保育の場において、発達に沿った食行動や望ましい食習慣の定着、心豊かな人間性の育成」が述べられている。

ところが食育の定義や内容及び方法が具体的にどこからも示されないまま、幼稚園や保育所の現場では、子どもたちの心身の健全な発達・発達を目指して食育はとりあえず急発進してしまった。

その後、2011年に「第2次食育推進基本計画」が策定され、保育所での食育は保育の一環として位置付けられ「食を通じて健康な心と身体を育て、人と関わる力を養い、伝承されてきた文化の理解や郷土料理への関心、自然の恵みとしての食材や調理する人への感謝の気持ちをはぐくむように努める」ことが加えて示された。さらに、食の乱れが病気を招くとして食育は子どもだけのものではないと「第3次食育推進基本計画」が2016年4月からスタートしている。

そこで、今回H県K市A認定こども園での地域性を主にして長年取り組んできた実践を取り上げ、その活動を振り返り、まとめ、計画やその内

容を分析し、保育現場における「食」の教育的意義、すなわち「生きる力」としてのスキルが子どもたちの中に培われているのか、加えて家庭へ母親たちの支援となっているのかを考察し、乳幼児期の食育活動の在り方を検討したいと考えた。

鈴木（2010）は、子どもから家庭への波及効果や影響として、幼稚園や保育所での食育の取り組みは子どもだけでなく保護者の食生活にも変化が見られると捉えている。幼稚園や保育所での地域連携を考慮した活動、すなわち保護者がこのような園の活動を通して幼稚園教育を具体的に理解することができる。

また、保護者が幼児との体験や感動を共有することは、幼児の気持ちや言動の意味に気付いたり、発達の姿を見通したりすることにつながるようになることも述べている。

鈴木（2010）が述べているような効果についても考察していく。

(2) 研究の目的と方法

A園での食育活動は、幼稚園教育要領「健康」の領域に示されているように「食べる喜びや楽しさを味わったり、様々な食べ物への興味や関心を持ったりするなどし、進んで食べようとする気持ちが育つようにすること」など、子どもたちの食に関する学びへと繋がっているのか。また、子どもを通して家庭や母親への支援に繋がっているのか。教育要領に示されている教育的意義を考察することを目的とする。

今後、食育として独立した活動ではなく日常の保育の中の一環として、カリキュラムの中へ加えていきたいと考える。

2. 保育での実践

(1) 地域性を取り入れた食に関する保育の実践

園が所在するH県K市は、田園地帯の広がる人口5万人足らずの田舎町である。園の西隣には、0.3ヘクタールの畑地が広がり、鶯の声とともに春が訪れ、竹藪にはたけのこが頭をもたげ、畔にはよもぎやたんぼぼが咲きそろう、時には悠々と雉の親子が道を横切っている姿にも出会う豊かな里

山である。子どもたちは、教師からその時期にふさわしいわらべうたや歌、絵本やお話を通して、四季や旬を身体で感じ味わっている。これらの保育実践を以下に食育計画とともに表1にまとめている。

表1 食育の実践例と食育計画

| 月別による子どもの活動 | | | |
|-------------|--------------|--|--|
| 4月 | たけのこ | たけのこ堀り  | 園での観察。家庭へ持ち帰る(糠、レシピ) |
| | 保育の展開 | 観 察 ：匂いを嗅ぐ・触れる・観る・食す わらべうた ：たけのこめだした・どのたけのこが 絵 本 ：たけのこ・ふしぎなたけのこ くまのプーさん・ぐりとぐら 歌 ：たけのこ |  |
| 5月 | いちご | 苺採り(子育て広場・未就園児親子も) 苗の植え付け(夏野菜・さつまいも等) 水やり 年長組の取組 トマト苗植え(K社より苗をいただく) | 園で試食 各自ペットボトルを持参して水やり |
| | 保育の展開 | 観 察 ：匂いを嗅ぐ・触れる・観る わらべうた ：いーもの にーたの・ちいさなおにわ お寺のおしょうさん・茶摘み 絵 本 ：いちご・くだもの・いちごばたけのおばあさん 歌 ：いちご・さんかくトライアングル・さくらんぼ | |
| 6月 | じゃがいも 玉ねぎ | じゃがいも堀り、玉ねぎ堀り 田植え見学 | 家庭へ持ち帰り (レシピも) |
| | 保育の展開 | 観 察 ：匂いを嗅ぐ・触れる・観る わらべうた ：おべんとぼこ・おちゃをのみに かわのきしの 絵 本 ：たぬきのくるむら・くさる 歌 ：びわのうた おなかのへるうた |  |
| 7月 | 夏野菜 | きゅうり、ピーマン、 トマト、かぼちゃ  | 家庭へ持ち帰り。宿泊保育での利用(サラダ・カレー等)・参観日の降園の際に親子での収穫体験 |
| | 保育の展開 | 観 察 ：匂いを嗅ぐ・触れる・観る・調理する わらべうた ：ほうずきばあさん・そうめんやそうめんや おらうちのどてかぼちゃ 絵 本 ：おやおやおやさい・すいかのたね 歌 ：ふしぎなポケット・こんぺいとう |  |

| | | | |
|-----|--------------|---|--|
| 8月 | 夏野菜 | 預かり保育参加の園児と野菜取り | 家庭へ持ち帰り (レシピも) |
| | 保育の展開 | 観 察 ：匂いを嗅ぐ・触れる・観る わらべうた ：めんたまたって・あぶくたった 絵 本 ：かわたろう・おきょちゃんとかっぱ 歌 ：トマト・カレーライスのうた |  |
| 9月 | ぶどう | N高校・園芸科の招きで高校生徒と一緒にぶどう狩り (交流事業) | ぶどうジャム試食 (高校より) |
| | 保育の展開 | 観 察 ：匂いを嗅ぐ・触れる・観る・採る わらべうた ：えんやらもものき ひとやまこえて 絵 本 ：14ひきのお月見 歌 ：そらはばんやさん |  |
| 10月 | さつまいも・くり | さつまいも堀り・栗ひろい・稲刈り見学 | 家庭へ持ち帰り (レシピも) |
| | 保育の展開 | 観 察 ：匂いを嗅ぐ・触れる・観る・掘る・拾う わらべうた ：ぎっちょぎっちょ・コメコメ 絵 本 ：からすのぼんやさん・おおきなかぶ くずのはやまのきつね 歌 ：大きな栗の木の下で・大きなカブをぬこう |  |
| 11月 | | 散歩であげび・むかご探し・焼き芋大会 収穫感謝祭礼拝 | 保護者参加の焼き芋大会 |
| | 保育の展開 | 観 察 ：匂いを嗅ぐ・触れる・観る わらべうた ：いーもの にーたの 絵 本 ：さつまのおいも おおきなおおきなおいも うりひめとあまのじゃ どうぞのいす 歌 ：やきいもグーチーパー でぶいもちゃん ちびいもちゃん |  |
| 12月 | 大根 おみそ汁デー | 大根引き 年長クラス・グループ別調理実践 | 家庭へ持ち帰り (レシピも) 園で試食 |
| | 保育の展開 | 観 察 ：匂いを嗅ぐ・触れる・観る わらべうた ：ダイコンツケ 絵 本 ：なきむしだいこん 歌 ：にんじん・だいこん・かぶら |  |

| | | | |
|----|------------------|--|---|
| 1月 | おみそ汁デー | 年長クラス・グループ別調理実習 切干作り・漬物作り（職員） | 園で試食 家庭への持ち帰り （レシピも） 参観日の降園時に親子で大根引き  |
| | 保育の展開 | 観 察 ：嗅ぐ・触れる・観る わらべうた ：おしょうがつはええもんだ おもやのもちつき 絵 本 ：かさじぞう・あけましておめでとう 歌 ：おもちのうた | |
| 2月 | おみそ汁デー クッキー作り | 年長クラス・グループ別調理実習 豆まき（節分） H高校生とクッキー作り体験 （ふれあい体験）  | 園で試食 H高校で高校生と一緒に  |
| | 保育の展開 | 観 察 ：匂いを嗅ぐ・触れる・観る わらべうた ：あめこんこん ゆきこんこん 絵 本 ：おとうふやさん おにはそと ふくはうち ないたあかおに 歌 ：まめまき |  |
| 3月 | | お別れ会・・・全クラス一緒におべんとう 春を探しに散歩 |  |
| | 保育の展開 | 観 察 ：匂いを嗅ぐ・触れる・観る わらべうた ：ずくぼんじょ 絵 本 ：もりのひままつり 歌 ：うれしいひなまつり | |

子どもたちは、1年を通して多くの野菜や自然の恵みと出会い、3年あるいは4年の在園中に継続的な体験をすることになる。こうした体験から、収穫の楽しみを味わうことはもちろん、観る・触る・匂う・採る・味わうなど多様な経験を通して感性の発達や情緒の安定、好奇心や探究心といった積極性や意欲、そしてコミュニケーションを大切に人とつながる社会性など、人生の基礎である乳幼児期に多くのものが培われていくと考えられる。

ところが、子どもたちの活動の背景には並々な

らぬ大人の手が加わっていることも決して見逃がすことはできない。畑を耕すトラクター、虫や鳥たちの侵入を防ぐための網張、野菜が大きく育つための間引き、そして一番大変なのは草取りである。子どもたちは水やりや時には自分たちも草取りに出かけ、野菜の成長過程や世話をしている大人の様々な働きを目にすることになる。

園での栽培活動を通して、収穫の喜びはもちろん、匂いの中で出会う恵みに対する感謝の気持ちや野菜の成長過程には、自分たちを含め多くの人の手がかかっていること。同時に収穫した野菜を子

どもたちが食するとき、大切な命を「いただきます」そして多くの恵みに「ごちそうさまでした」の気持ちが自然に培われていき、そこには心豊かな人間性の育成が育まれていると捉えることができる。その他、園には竹藪や栗林が隣接しており、子どもたちは、たけのこ掘りや栗拾い、散歩の途中で出会う「あけび」や「むかご」「野いちご」や「木いちご」など自然との出会いに恵まれる。

(2) 家庭への食の啓発

(保育とコラボしたプリントを毎月1回配布)

楽しい食卓は、子どもの心の成長、健全育成に大きな影響を与えることはもちろん、人の心と体は相互に深い関係を持ち、影響し合いながらバランスを保とうとしている。人が食することは、食物を調理し、いかに美味しく食べるか、楽しく食べるか、食事のマナーを学ぶなど人間としての特性でもある。

また、家族や友人などとの共食によってコミュニケーションを深め、その結びつきを強める大切な食の社会的な役割を担っている。室井(1995)は食卓での人間関係は、心を育てること人格形成、心を立て直すこと不調回復など、人間関係の構築や修復になくはならない働きを作り出す場であると述べ、食卓は食事を共有しながら家族との生きたコミュニケーションを得る大切な場であると臨床心理学の立場から捉えている。

ところが現在、家族のために料理して、家族が集い、にぎやかに食するというごく当たり前の状況が急激に減ってきている。調理済の食品が食卓に並び、家族がそれぞれバラバラな時間帯に食べ、会話もなく、テレビの音だけが聞こえる味気ない食卓風景となっていないだろうか。

本来の食卓の姿、食事風景を取り戻したいと願い「食の啓発」として配布したプリントは、旬の食べ物や行事食を題材にし、保育と関連付けた内容である。

(3) 年長児の調理実践「おみそ汁デー」

対 象：年長組

調理期間：2学期後半～3学期

人 数：1グループ5～6人程度

場 所：年長保育室前のテラス(食材を洗う、切るなどの下準備)

煮込みは園の調理室

調理器具：子ども用調理器具使用(料理研究家坂元ひろ子監修)

指 導：指導者1名、補助1名

食 材：調理当番園児持参(各児1種類)、園で採れた野菜、愛菜館(地元の食材を販売)での購入

【調理手順】

前日までの準備

- ①クラスでの話し合い
- ②調理グループでの話し合い
- ③愛菜館へ園バスで買い物(担任と担当園児)

調理当日

- ①調理器具の準備
- ②クラスでの話し合い
- ③調理当番話し合い・調理の心得・服装の準備
- ④調理開始
 - ・手を消毒・野菜を洗う・野菜を切る
 - ・包丁、調理ばさみ(包丁使用の場合は猫の手で切る)・材料毎にざるに入れる・煮干しは下処理(頭とお腹とって半分こ)と拍子を付け、歌いながら行う。
 - ・煮干しを食してその味を感じる。
 - ・鍋に煮干しを1番に、その後、硬いものから順に入れて火にかける。
 - ・野菜を煮込んでいる間に「おみそ汁のネーミング」を考え、紙に書いて飾り、食する前に発表する。
 - ・野菜が柔らかくなったら、味噌を入れて味見をする。
 - ・豆腐を手のひらの上で切り、鍋(ネギも)に入れる。
- ⑤出来上がった味噌汁は4歳児や教師たちにも試食してもらう。
- ⑥調理当番がネーミングを発表した後、みんな

で会食。

- ⑦食後、調理当番が準備物等を教師と共に片づける。
- ⑧降園時にクラスで活動の反省点や感じたことなどを話し合う。
- ⑨子どもたちの「おみそ汁デー」体験のプリント配布
「おみそ汁デー」の体験プリントは年長組の担任が作成し全クラスへ配布。

3. まとめと考察

「食」という字は人に良いと書く。ところが今は「飽食の時代」とも呼ばれ、多様な食材を口にする現在人にとっては、食するものを選別しなければならなくなっている。故に食することイコール良いとは限らなくなってしまった。その昔、居住している四里四方、すなわち約16キロ圏内で収穫されたものを口にすることが体に良いとされていたが、現在は国境を越えて様々な食材が流通し、その安全性を危惧する多くの事態が起こっている。そこで人びとは再び地産地消の大切さに気付き、雑多なものから、より安全なものへとその嗜好が変化している。

保育の中での「野菜栽培」は、子どもたちに多様な感動と驚き、さまざまな気付きと学びを与えてくれるもの。加えて食の安全性など、「食を営む力」の基礎を培うものであると考えられる。

食育実践は、幼児教育の基本とする「環境を通して行うもの」であり、そこから展開される保育内容は、その季節にふさわしい歌やわらべうた、お話や絵本体験などの遊びとともに、5領域を通して総合的に達成される営みである。

例えば、4月に「竹の子掘り」を体験する子どもたちは、竹藪・竹・竹の子を五感で捉えることになる。保育の展開としては、わらべうた「たけのこめだした」や手遊び「どのたけのこが」、歌「たけのこ」などの表現活動を通して先生や友だちと存分に楽しみ、絵本「ふしぎなたけのこ」、「かぐやひめ」などの読み聞かせでは想像の世界を旅することになる。年長組ではかがく絵本「たけのこ」の読み聞かせを通して、その生態にも触れること

になる。竹藪で掘った竹の子は協力して園に持ち帰り、皮をむいたり、匂いを嗅いだり、ひんやりとした真新しいものに触ったり、皮を丸めて音を出したりと子どもたちは多様な体験をして、最後に家庭に持ち帰り園での体験話も添え、家族とともに味わい食することになる。

倉橋（1931）は「生活で、生活を、生活へ」という「生活による生活の教育」と称しており、先生や友だちとの遊びを通して展開される園での生活は、食育も含め季節にふさわしい文化や知識を体得していくことになり、生きる力の基礎である心情、意欲、態度が培われている。

「家庭への食の啓発」としてのプリント配布について廣らは（2012）はその効果として、「今まで以上に旬の野菜や果物を食べるよう意識するようになった。」「旬以外の野菜は出来るだけ使わないようにしています。」「旬の野菜が出ると子どもと、あれ作ろうかと当時のレシピの話題になります。」「『食に思う』と一緒に載せていただいていたレシピなど、一度作ってみたい料理を覚えて作れるようになった。」「レシピを色々載せていただき、ファイルに入れて使用しています。」「献立のメニューが増えたり、旬の野菜での調理を心がけている。」「今も行事を大切に、まつわる料理を家族で楽しんでいます。」など、母親たちのコメントを紹介している。これらのことから、家族が楽しげに囲む食卓風景や笑顔で会話する様子が伺える。まさに「和やかな雰囲気の中で食べる喜びや楽しさを味わったり、様々な食べ物への興味や関心をもったりするなど、進んで食べようとする」気持ちが家庭の中でも育っていると捉えることができた。

家庭の食卓は、家族のコミュニケーションの密度が濃くなる中核の場所であり、そこに母親の笑顔が添えられると、家族そろってとる食事には子どもたちの育つ理想的な環境があると室井（2009）は述べ、食卓とは心理的な場所、人間関係を凝縮した場所であり、人間関係の質をはっきりと示す場所であると捉えている。長良ら（2003）や岡見ら（2012）は、有効な食育の効果を得る要因は、家庭において家族同伴で食事をするところであると報告している。すなわち、園児が家族と食事をと

にもすることで、食べ物の話や食事の指導をする機会が多くなり、コミュニケーションをとることができ、食育の効果を高めることにつながるとしている。

これは我々の結果と同様であり、「食への思い」のプリント配布は親子のコミュニケーションの機会や行事食など、様々な食べ物に興味や関心を持つことにつながっており、家庭への食の啓発になっていたと考えられる。

「おみそ汁デーについて」は、その日の担当グループでみそ汁を作り、4歳児クラスや教師たちにも試食してもらおう。その後、「ごちそうさま」や「美味しかった」などの感想を耳にする。食事中に友だちや先生たちが「おかわり」と美味しく食べている様子を目にしたことも含め自信や満足につながり、家庭においては手伝いをする事につながっていた。

また、調理実習は継続的な活動であるために、年長児がエプロンや三角巾、マスクをつけて調理している姿に年少児たちは、かっこいいなと憧れ、「年長クラスになったら自分たちがおみそ汁を作るのだ」と、期待を持ってその日を迎えることになる。

調理が始まると諸注意等にも真剣に耳を傾け、だしを取る煮干しを味わったり、手のひらで、豆腐を切ったりと緊張の面持ちで取り組む。その後、野菜が煮上がるまでの時間には、おみそ汁のネーミングを話し合い、紙に書き食前に発表する。その子どもたちの顔は実に誇らしげである。調理実習後には、母親たちからお便りが寄せられる。それらは「おみそ汁が大好きになった。」「食べられる野菜が増えた。」「苦手なものでも食べてみようとしていた。」など肯定的なものであった。

調理実習を体験した子どもたちは、様々な食べ物へ興味や関心が湧き、進んで食べようとする気持ちが育っていたり、「将来の夢は一流シェフだそうです。」と自信や憧れにつながった子どもや調理することに「子ども自身がとても楽しんでいた。」など、母親らの報告から子どもたちが主体的に調理に望んでいた姿を捉えることができた。

高橋・川田(2008)らは、ハヴィガースト(1953)

の発達課題「発達には、それを学習するのに特定の時期がある」ことを捉え、乳幼児期という6年間の育ちは、生涯において最も急激な変化の時であり、その時期に学ぶべき課題は多い。

接触機能の獲得、食行動の自立といった技術的な学びと、共食共感という社会性や心理などの質的な学びは、生涯の食行動や食習慣の基盤となり、生活習慣の定着や健康教育を基本にした知識の獲得にもつながるとこの時期の食育活動を教育の適時と捉えている。

4. おわりに

岡見ら(2012)は、食育を実践している家庭では、生活習慣全般のしつけが行き届き「よく食べて、よく寝て、よく遊ぶ」と捉え、母親の意識だけで食育を含めたしつけを行えると示唆している。鈴木(2010)は食育を取り組む際、保護者を抜きにしてはうまく進まないとし、保護者が、幼稚園や保育所で行っている取り組みを通して、変化した子どもから主体的に学ぶことが重要になってくると述べている。

当園での食育実践は、「野菜の栽培」、「調理実習と報告」、「保護者への啓発」、との三つが保育の中で関連し合い良い相乗効果を生み出していたと考えられる。子どもたちが五感を通して行う直接体験は、感動や喜び、満足、そして自信につながっていく。このような子どもの姿を目の当たりする保護者らは、子どもらの報告や園から届けられるプリントなどを通して、共感したり、楽しさや嬉しさを共有することになり、食に対する意識がより増していくと捉えることができた。

昔「生きることは食べること」であった。ところが近代化と高度経済成長は、物の豊かさとともに人として大切なものを置き去りにしてきてしまっている。その一番大事なものが「食べる」こと、社会性の動物である人間にとって「共食する」ということではないだろうか。豊かなはずの食卓は、我々に気ままや我儘という自分勝手な自己中心的な心を植え付けてしまっていることを懸念する。

幼い子どもたちに携わる者にとって、子どもが

育つ家庭の大切さや在り方を、そしてその中心にある食卓の重要性を保護者へと発信していくことは大切な使命であると考え。保護者や母への意識の変容を促していくためには、食の原点を踏まえた活動を促し、より充実した展開へと実践を進めていくことが必要である。

それには、年間計画の中へ食育計画を織り込み作成し、活動後には記録、評価、改善、再評価する。その取り組みについて全職員で意義や必要性を共有する。このような取り組みは食育としての教育的意義をより高めることになっていくと考えられる。

子どもは園で学んだことを家庭で披露したいという気持ちがあり、子ども自身が園の続きを家庭に持って帰ってくれる。家庭を変えていく力を一番持っているのは子ども自身であると小川(2009)は捉えている。

今後、上述しているように目標、計画、評価のサイクルを通した取り組みを行い、一つひとつの取り組みが豊かになっていくことを考慮していきたい。それによって生み出される相乗効果を期待し、全体の保育内容がより向上していくことを願っている。

〈参考文献〉

1. 生田哲 2005 心の病は食事で治す PHP 新書
2. 岩村暢子 2003 食にみる子育ての危機 園と家庭をむすぶげんきNo79 エイデル研究所 4-17
3. 岡見雪子・関豪・辻とみ子 2012 幼稚園児の食生活と母親との関連性、名古屋文理大学紀要 第12号：131-142
4. 小川雄二 2009 食育を推進するための理論と実践 園と家庭をむすぶげんきNo112 エイデル研究所
5. 厚生労働省 保育所保育指針 2008
6. 鈴木秀子 2010 子どもから家庭へつなぐ食育 会津大学短期大学部研究年報 第67号：2-19
7. 高橋美穂 2009 食育の力 創成社
8. 長嶋正實 2004 小児期の生活習慣病と循環器病予防 日循予防誌 第39巻 第3号
9. 廣陽子・青木好代 2012 食視点からの母親支援 日本保育学会65回大会発表要旨集
10. 室田洋子 2009 食卓から見える子どもの心・家族の姿 芽ばえ社
11. 文部科学省 2008 幼稚園教育要領
12. 文部科学省 2008 幼稚園教育要領解説
13. 倉橋惣三 1929 津守真・森上史郎編著2008 幼稚園雑草(上) フレーベル館 P38
14. 高橋美保・川田容子 2008 幼児保育における食育活動の教育的意義 白鷗大学教育学部論文2(1)：57-70
15. 内閣府 食育基本法 2005
16. 内閣府 第2次食育推進基本計画 2011
17. 内閣府 第3次食育推進基本計画 2016
18. 辻村明子・久保薫 2015 保育所・幼稚園における食育実践状況に関する系統的レビュー 青森中央短期大学研究紀要 第28号：85-92
19. 三田村理恵子 2013 保育園児および保護者に対する食育支援活動プログラムの開発 藤女子大学人間生活学部紀要 第50号：45-51
20. 平松知子ら 2014 8つの園実践がひびきあった食育活動(1) 椋山女学園大学教育学部紀要7：237-249
21. 森山洋美ら 2015 青森県内の幼稚園・保育園におけるクッキング活動の実態調査 青森中央短期大学研究紀要 第28号：67-74